

刊行のことば

世界は一刻も休んでいない。しかも、今日は、交通通信の発達により、国境を越えた人、物、金、情報等の流通がますます活発になりつつある。いわゆるグローバリゼーションの流れの中で、世界各国の社会経済は、過去には見られなかったような速さで変化しつつある。農業といえども、その例外ではあり得ない。

日本の農業も、独自の条件をもっているとはいえ、世界の農業とのつながりは、ますます大きくなっている。世界とともに考え、世界とともに伸びるのが、日本農業の今日の使命である。この叢書の目的とするところは、まさにこの使命を忠実に実行するところにある。

編集委員

安藤光義	鈴木宣弘
池上彰英	立川雅司
大山利男	三石誠司

(五十音順)

変動する中国の豚肉業界

解題／翻訳 三石 誠司

解題	2
変動する中国の豚肉業界	6
イントロダクション	6
国内マーケットの変動とリンクして増加する中国の豚肉 輸入動向	7
上昇する中国産豚肉の価格とコスト	11
中国の豚肉マーケットの周期性	18
ホッグ・サイクル安定化を意図した中国の政策	24
豚肉マーケットに影響を及ぼす疾病の流行	35
環境面および食の安全面からの圧力	39
将来を見据えて	42

解題

三石 誠司
(宮城大学教授)

本稿は、2012年2月に米国農務省経済調査局（USDA-ERS）のフレッド・ゲール（Fred Gale）他により作成された報告書、『China's Volatile Pork Industry』の全訳である。

中国は今や米国にとってあらゆる面で無視できない存在だが、著者のゲール等には、それでもまだ米国の農家やビジネス・リーダー、そして政策担当者にとってさえ、中国という国の持つ「奥の深さ」が十分に理解しきれていないといういらだちのようなものが感じられる。特に米国産豚肉の潜在的な輸出先として「ほぼ無限（almost incomprehensible）」とまで言われていながら、実際の貿易という面では様々な障害に直面している現状を、少しでも改善したいという思いが伝わってくる。こうした障害には、中国の国内の豚や豚肉価格の変動だけでなく、小規模農家による“裏庭”養豚という生産の実態に加え、頻発する疾病や何よりも飼養頭数そのものが年により大きく変動し、そこに中国当局の政策介入が加わり複雑さを増していることにも原因がある。その結果、一見、米国は「東洋の神秘」に翻弄されているかのような趣すらある。

しかしながら、本文中にもあるように、中国当局は豚肉産業におけるこうした伝統的構造を「近代的な」畜産部門に転換するために様々な施策を実施している。残念ながら、本報告書を見る限り、それらの全てが上手く機能しているとは言えないが、ゲール等がこの報告書で述べている内容は、途上国に対する米国の市場開拓と農産物輸出がどのような形で行われるかという手法について、豚肉を例に、ある国にとって不可欠な農畜産物や食品を米国が販売しようとするときに、どのような分析と手法を行うかという点で、非常に示唆に富んだ内容となっている。何故ならば、我々の多くが既にコメや牛肉、果実類を外国から受け入れてきており、それを所与のものとして受け止める世代が増加する中で、風化されつつある前段階の記憶と留意点を明確に示しているからである。

報告書の全体は「イントロダクション」、「国内マーケットの変動とリンクして増加する中国の豚肉輸入増加」、「上昇する中国産豚肉の価格とコスト」、「中国の豚肉マーケットの周期性」、「ホッグ・サイクル安定化を意図した中国の政策」、「豚肉マーケットに影響を及ぼす疾病の流行」、「環境面および食の安全面からの圧力」、そして「将来を見据えて」となっている。各項目の詳細は訳文を見て頂くとして、ここでは上記の項目の中から日本の研究者や政策担当者、そして何よりも農業関係者にとって有意義であると思われる点をいくつか紹介し、合わせて若干の訳者の見解を記しておきたい。

第一に、既に中国の豚の生産コストは米国よりも高く、過去10年でほぼ倍になっているという単純な事実である。中国の生産コストは安いという印象を持っている方は多いと思うが、本文で述べられている環境問題や疾病への対応といった外部コストを除外しても、既に米国の豚の生産コストよりも高いという点について、農業関係者は十分に理解しておくべきではないかと思う。

多少乱暴な意見だが、中国人にとっての豚肉は日本人にとってのコメに相当するかもしれない。その上、世界の豚肉の生産と消費のほぼ半分を占めているとなれば、生産コストが倍になるということは中国にとっては国家的課題と言っても間違いではない。中国政府が可能な限り豚肉の国内自給を維持しようとしている背景にはこうした基本的ポリシーが関わっている。それにもかかわらず、経済成長はかつてのわが国と同様の諸問題を、より大きな規模で中国に対して突き付けてきているのである。

第二に、ホッグ・コーン・価格レシオについてである。この指標がここまで中国で用いられていたというのは不勉強な訳者にとっては驚き以外の何物でもなかったというのが素直な感想である。この古典的な指標については30年近く前に駆け出しの穀物トレーダーとしての訓練を受けたときから知っていたし、日々のシカゴ相場を見る中で折に触れてチェックすべきポイントであったことは事実である。しかしながら、本報告書にも述べられているように現代の米国

の穀物や畜産物マーケットを見る際には、あくまでも多数の指標のひとつに過ぎず、それも正直に言えば余り影響力の無い後付け指標のような感すらある。

ところが、現代中国においては、中央政府レベルから地方政府レベルに至るまでこの比率を政策決定の重要指標として活用している。中国当局がこの指標をどのように活用しているかの詳細は本文を見て頂きたいが、ゲール等は、現代中国の様々な変動要因は決して中国独自の特別なものではなく、突き詰めてみれば米国や他の国においても経済発展のある段階で発生したものと同一であるということ、この古典的な指標を例にして極めて明瞭に説明している。つまり目の前の「東洋の神秘」に惑わされてはいけないということであろう。

第三に、米国産豚肉の潜在的なマーケットとしての中国の将来性である。事実を中心とした記載の中に時折見える作者らの見解を順番にまとめてみると、まず、豚肉輸出の将来は良好だが依然不安定であるというところから始まり、伝統的な“裏庭”養豚から「近代的」な畜産への転換が可能になれば疾病の予防や管理も可能になるだけでなく、輸入豚肉に対する抵抗感も減少すると主張している。その一方で、現代中国の過密な飼養密度と環境へのネガティブな影響から中国の養豚業界の今後の成長には一定の制約があると考えている。もちろん、この背景には、Hayes and Clemens が 1997 年に述べた「中国で豚を育てるために大量の穀物や油糧種子を輸出するよりも、米国において飼料資源の近くで豚を育てることにより中国の豚肉需要に対応する方が、よりコスト効率はよい」という考え方がある。さらに、国内自給を完全に放棄したともいえる大豆を例に取り、米国と中国両当局の食料供給に関する微妙な綱引きを匂わせながらも、最終的には米国の農産物輸出は、単純な原材料である穀物から付加価値商品である食肉の輸出へとシフトしていくべきという大きな戦略的方向性を示している。

以上が簡単な印象であるが、これらは全て中国だけの問題ではない。生活水準の向上にともなう食肉需要の急増に応えるため、過去半世紀以上にわたり国

内の畜産生産基盤を整備しながら大量の飼料穀物を輸入し、さらに食肉輸入も実施してきたものの、国内の畜産業が環境問題や後継者問題などで危機的な状況にあるわが国の将来にとっても無視できない重要な問題であろう。自らの経験からしか学べない者が愚者であるならば、我々は経験だけでなく、過去の歴史と現在進行中の隣国の事象を踏まえ、将来への道筋を作りだすことこそが求められているのではないかと思う。

この報告書の全文は米国農務省経済調査局のウェブサイトですぐ入手可能である（アドレス：http://www.ers.usda.gov/media/262067/ldpm21101_1.pdf）。翻訳においては可能な限り原文に忠実になるように努めたが、部分的にはかなりの意識を施した箇所もある。特に畜産関係の専門用語に関しては一定のルールに従って翻訳を行ったが思わぬ間違いがあるかもしれない。さらに、中国語表記の原文が参照可能な場合には確認を取っているが、英文からの日本語訳と中国語の原文を照会してみると微妙にニュアンスが異なる箇所があることは否めない。翻訳文についての一切の責任は訳者にあることを申し添えておきたい。気になる方は上記の原文に当たって頂ければと思う。今更ながら実務に堪えられる中国語能力の必要性を痛感した次第であるが、こちらの方は、将来の課題としておきたい。また、英文から推定した中国語の原表記の一部について、日本大学生物資源科学部の劉坤氏に貴重な助言を頂いている。ここで改めてお礼を申し上げます。

なお、最後になるが、同じ作者と拙訳による『中国からの食品輸入と食の安全』（「のびゆく農業」995-996号、2011年3月）と本号を合わせて読んで頂ければ、現在の中国が抱えている問題に対し、米国がどのように対応しているのかが一層よく理解できるのではないかと思う。

変動する中国の豚肉業界

Fred Gale、Daniel Marti、Dinghuan Hu

三石 誠司 訳

イントロダクション

主要な豚肉輸入国としての中国の潜在性は、世界中の養豚農家、ビジネス・リーダー、そして投資家達に様々な機会を提供している。「中国における米国産豚肉の長期的潜在性は巨大」(Hayes, 2010年)、あるいは「中国の更なる豚肉輸入の潜在性はほぼ無限 (almost incomprehensible)」(Dyson, 2008年、に引用された養豚業界観測筋のコメント) など、グローバル・マーケットにおける中国の影響を検討した文章やニュースレターは軽快な楽観主義を示している。中国に対する豚肉販売の発表は、米国のマーケットにも影響を与えている。例えば、ウォールストリート・ジャーナルは2009年10月に、「米国産豚肉の輸入を解禁するという中国の誓約は、世界最大の豚肉消費者への輸出が増加するとの期待から、豚の赤身肉価格を過去3カ月の最高値に導いている」と伝えている (Cui and Waters, 2009年)。

世界の豚肉マーケットにおいて中国がより大きな役割を果たすようになるにつれ、業界のアナリスト、ビジネス・リーダー、そして政策立案者にとっては、中国の養豚・豚肉部門を動かしている複雑な要因について理解することが重要になってきている。中国の豚肉業界は、疾病の流行、飼料価格、政策介入、季節ごとの消費パターン、他の食肉の需要、そしてマクロ経済的要因を含む様々な影響により常に翻弄されている。商品価格の上昇傾向に多くの注目が集まっているが、中国における豚肉価格は、あたかも業界が拡大や縮小しているかのように複数年の周期で上昇と下落を繰り返している。このボラティリティ (volatility : 不安定さ) の程度は、広範な政府介入に促されたことと、民間投